

網走特産種苗センターの概要

(1) 設立

網走特産種苗センターは、昭和43年12月に財団法人日本特産農作物種苗協会の設立と同時に、現地における種苗生産拠点第1号として、網走郡女満別町（現大空町）に設置されました。

(2) 位置

当センターは、大空町女満別市街地から北へ約4 kmの所に位置し、女満別空港から約9 km、JR 網走駅から12kmほどの距離にあります。

(3) 土壌・気象

土地は台地にあり、全体的には平坦ですが、一部は緩やかな波状を呈しております。土壌は褐色火山性からなり、腐植に富み、排水性は良好です。農耕期間の気象条件は（5～9月の積算値）、平均気温が2,312℃で畑作条件としてはやや冷涼で、一方降水量は398mmと少なく、日照時間は793hrで多いといった特徴があります。また、海岸まで約10kmと近いため、平年の無霜期間は157日と比較的長いといえます。

(4) センターの規模

職員数は4名。耕地面積は27haで、建物敷地等を含め総所有面積は31.1haです。

(5) 事業内容

当センターでは、表1に掲げた9種類の作物、合計21品種の原原種・原種を生産し、農業団体等を通じて主に道内に配布されています。以下に、特徴的な作物を紹介します。

①菜豆の1種である金時類は、網走地方の気象条件が適していることから、当センターにおいては豆類の中心的存在にあります。当センターが生産する「大正金時」および「福良金時」の原

原種は、全道の同品種原原種の約2/3を占めているだけに、目下、優良な種子生産をすべく取り組みの強化を進めているところです。

②その他のインゲンとして、当センターでは「福虎豆」と「大白花」という品種を栽培しています。これらは北海道では高級菜豆として区分され、網走と胆振の2地域において特産物として作付けされており、当センターはその原種供給の主要基地となっています。

③麦類は、秋まき小麦と二条大麦を作付けしていますが、北海道での二条大麦は大部分がビール原料として、網走と上川の2地域において限定栽培されています。当センターは、面積で全道の3/4を占める網走地域に対し、原種供給を全面的に支えています。

④馬鈴しょは寒冷地畑作農業を支える重要な作物ですが、農業者の高齢化による原種栽培農家の減少や、シストセンチュウの発生拡大に伴う原種生産ほ場確保難等々もあり、当センターではこうした状況に応えた原種の生産を行っています。

⑤ながいもは、地域特産物として北海道では貴重な作物になっていますが、形や色などの変異が起こりやすいこと、ウイルス病の発生が多いこ

表1 生産している種苗一覧（平成20年度）

作物名		区分	品種数	面積(a)
豆類	菜豆	原原種	2	210
		原種	2	150
	高級菜豆	原種	2	30
	大豆	原種	2	160
麦類	小豆	原種	1	30
	秋まき小麦	原種	1	400
		原種	1	280
馬鈴しょ	原種	6	699	
ながいも	原種	2	63	
	採種	1	30	
トウキ	苗	1	2.4	
計			21	2,054.4



写真1 菜豆・大正金時の原原種ほ
(原原種ほの間に2本の防除用通路がある)

となどから、優良種苗の生産・供給がながいも生産の重要な鍵となっています。当センターでは関係機関の委託を受けて、原種等を栽培しており、その一部はウィルスフリー種苗を生産するため、寒冷紗を使用したハウス栽培を行っています。

- ⑥当センターでは、平成5年度から薬用植物等難増殖作物の採種技術体系の確立調査に携わり、平成14年度から薬用植物であるトウキ苗の生産配布を受託しております。

(6) 優良種苗をめざした生産体制

(1) 4年輪作

北海道における畑作経営の基本輪作は、てん菜、馬鈴しょ、麦類、豆類の4年輪作とされていますが、当センターは種苗生産であることから、地力対策、土壌病虫害対策を兼ねててん菜に替り緑肥を導入して4年輪作に行っています。

(2) 地力対策

有機物補給対策としては、堆肥を外部から導入する入手難しいことから、前述したように30年ほど前から休閑緑肥を輪作に組み入れることになりました。緑肥の種類は、始めはとうもろこしが中心でしたが、土壌病虫害を考慮して、平成15年度からえん麦野生種を利用しています。

(3) シスト対策

ジャガイモシストセンチウの発生地域が広がっていることから、その侵入防止は種子生産上重要な課題であります。現在、当センターが行っている対応策としては、ほ場の周囲に幅2.5~10mの幅で、作物を作付けしない緩衝ゾーンを設けています。また、馬鈴しょほ場について



写真2 トウキ種苗生産ほ場と施設群

は、道路に接する側面にシスト抵抗性品種を配置するよう配慮するとともに、農道や構内には通行規制の立看板や柵を設けています。また、早急に、センター用地の外部からの隔離と、センターへの車・人によるシスト持ち込みを防止するため、囲障と洗浄施設・機械の整備を行うこととしています。

(4) 豆類の作付方式

豆類については種類が多いことから、輪作や交雑などに配慮した栽培を行っており、4年輪作の厳守を図っています。品種配列については、異種類のを間に入れることにし、区画ごとの間隔は3m、さらには防除畦として4畦あけることにしています。

(7) 調査研究の取り組み

種苗生産上の課題への対応、種苗生産技術レベルの向上等に対処するための調査研究を行うことも、当センターの重要な業務とされています。現在取り組んでいる調査研究課題には以下のものがあります。

- ①高級菜豆「大白花」の栽培法改善
- ②ながいも栽培法の改善
- ③トウキ苗の生産安定化